第１回
関西大学文学部 総合人文学科国語国文学／
森　勇太先生

平安時代には「あげる」も「くれる」だった？!

関西大学文学部の総合人文学科国語国文学専修で教鞭を執られている森勇太先生。その研究は「やる」「くれる」などの授受表現がご専門です。

『文章表現』の気づきやヒントを識者にお伺いするこのコーナー。第１回は、森先生に国語学とは何を研究する学問なのか、そして授受表現の時代的な変化などの日本語の面白さについて伺いました。

（聞き手／日本文章表現協会代表理事　西田延弘）

日本語は論理的にできている

森先生は関西大学の国語国文学専修（国語学：日本語の多様性や歴史的変化を学ぶ、国文学：各時代の文学作品や文学者について学ぶ）で研究をされていますが、そのような研究に取り組もうと思われたきっかけは何でしょうか。

私は、高校の国語の授業で古典が好きだったんです。なぜ好きだったかと言うと、例えば、伊勢物語に「昔、男ありけり」という冒頭句があります。それを「昔」「男」「あり」「けり」と区切って、「昔」「男が」「い」「た」というように訳していけば論理的に訳を導き出せます。このように対訳をするような古典のノートを作るのが、好きだったんですよね。

今でも研究を行う時などには、スライドとかレジュメを作るのが好きなんですが、高校生の時にはそのノートを作ることで、「なんと日本語っていうのは論理的に上手にできているんだろう」と気付き、文法の面白さを感じたんです。それで、大学に行ったら古典文法を専攻しようと思ったわけです。英語の文法も、中学生ぐらいの時には

面白いと思っていたんです。同じように、古典の日本語も一つひとつ対訳していけば、文章の意味が取れる。他の言語と比較してということではありませんが、自分たちの言語も論理的にできているということがよくわかったという体験をしたことが、この道へ進むきっかけになったのかも知れませんね。

それで国語学を研究することになったんですね。具体的には、国語学とはどういうことを研究する学問なのでしょうか。

国語学は日本語のしくみ自体を明らかにする分野です。音声・文法・語彙など、日本語のしくみを考えるにもさまざまな側面があります。私の専門は文法ですが、ことばのグループ（品詞）や語形変化（活用）について考える「形態論」や、係り結びなど、文の構造を対象にする「統語論」などがあります。私は「歴史語用論」という分野の研究もしていて、文脈やさまざまな場面の中で日本語がどのように使われているのか、コミュニケーションがどのように行われてきたのかという歴史も研究しています。

「やる」「くれる」はどう変化したか

森先生が研究されている、文脈やさまざまな場面で使われる日本語とは、どんな表現ですか。

私が卒論から取り組んでいるテーマは、「授受表現」の変化です。授受表現とは「やる」「あげる」や「くれる」、「もらう」という何かを誰かに渡す動作を表す言葉で、現代語だと自分から他人に対しては「あげる」、他人から自分には「くれる」という方向性による使い分けがあります。

昔は「あげる」は「やる」「くれる」と表現されていましたが、そのまま昔の平安時代だと、人に渡すのも「くれる」だし、人からもらうのも「くれる」というように使い方が違うんですね。現代語では人からもらう方向だけに「くれる」が使われるので、「なぜそうなったのか」を考え始め、卒論からの研究のテーマになったわけです。

なぜ「くれる」は双方向から一方向へと変化していったのでしょうか。

昔の「くれる」という表現は、目上から目下へという立場を踏まえたものでした。目上から目下、つまり犬とかカラスとかに「くれてやる」というような表現で「くれる」が使われていたり、『土佐日記』の中では、貫之が周りの人々に物を与えるといったような時に「くれる」が使われたりしています。

しかし、言葉を使う際には対人関係に配慮することは避けられないので、今では「自分が上に立つのは失礼だ」という意識が働きます。自分が上の立場に立って「俺からくれてやる」というようなことを言うのは失礼だけど、自分が下の立場に立って「誰かが私にくださる」というような意味で「くれる」を使うのは問題ないと感じられ、誰かから自分へと物を渡す方向にだけ「くれる」が使われるようになったんです。

なるほど。時代とともに言葉が変化していくのは面白いですね。日本語には方言というものがありますが、地域的な用法の違いというものもあるのでしょうか。

実は、同じ関西大学の同僚の日高水穂先生がその第一線の研究者なんです。「やる」という意味の言葉を話し手からの方向性によって、「あげる」／「くれる」、あるいは「やる」／「くれる」という使い分けをする方言は、九州北部から関東圏に分布しています。九州南部や東北地方では、自分からあげる方も「くれる」だし、自分がもらう方も「くれる」を用いる方言です。このような地理的分布を、方言学では周圏分布と呼んでいますね。

相手への配慮が表現を変化させた

対人関係に配慮した結果、表現が変わってきたというお話でしたが、敬語表現なども変わってきたのでしょうか。

私が研究したところでは、だんだん日本語は利益が特に自分にあることを示さないといけなくなってきたということが言えます。

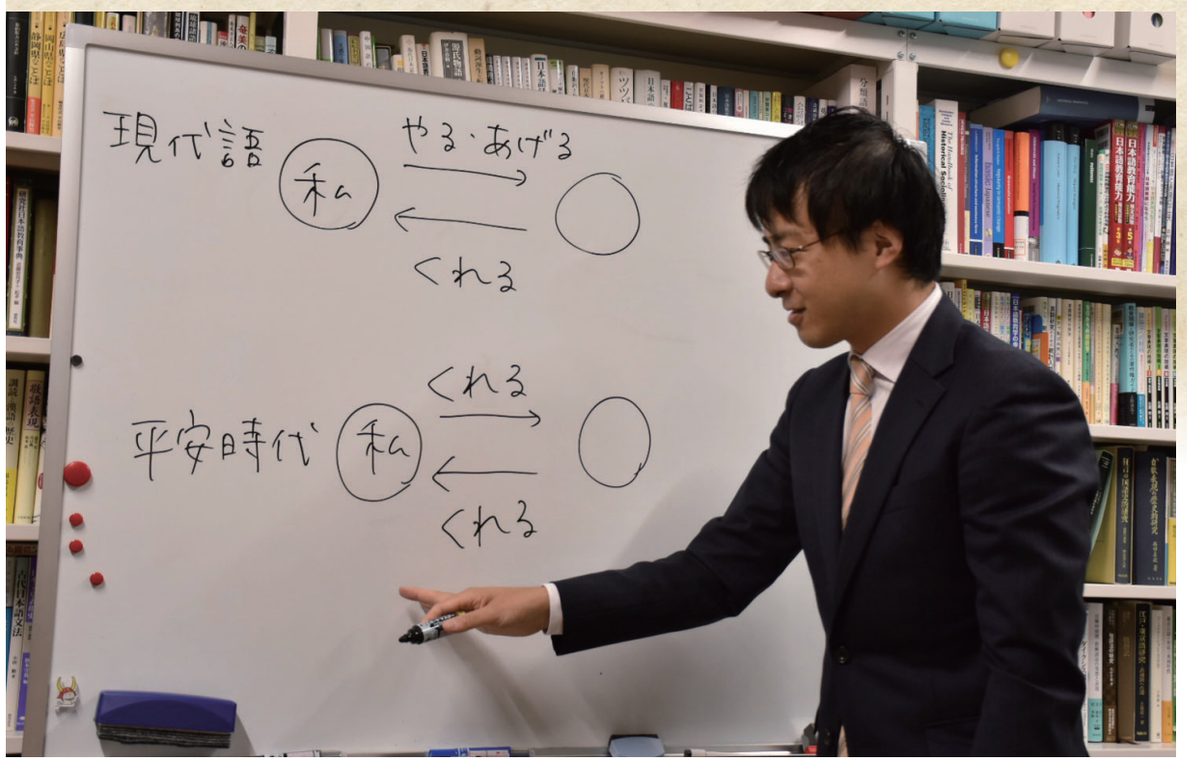
「～してくれる」「～してくださる」という表現がありますよね。恩恵が自分にあるということを示す表現で「受益表現」というんですが、平安時代はそういう表現はないんです。「くれる」という表現はありますが、「～してくれる」という表現はなく、受益表現は鎌倉時代ごろに成立します。

現代だと「～してください」というとかなり命令的で強制力が強く、「～してくださいませんか」あるいは「～していただけませんか」のような聞き方をしないといけなくなっています。目上の人物に対する命令・依頼をするときに受益表現を使わなければならなくなったのはだいたい明治期ぐらいからですね。

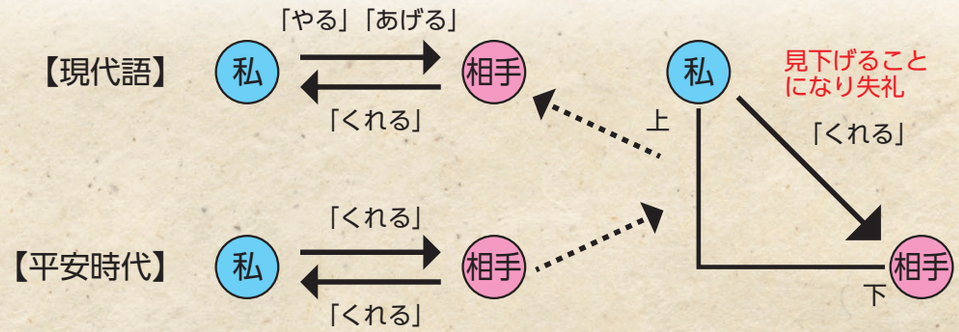
それは、何の影響で変わってきたのでしょうか。

今のところ要因として考えているのは、社会の変化です。江戸時代までは身分・階層がはっきりしていたということです。そういう社会の中では、敬語さえ使っておけば相手への配慮は果たされることになります。しかし、明治期になると人の移動が多くなりますし、身分によらない複雑な人間関係ができてきます。現代で言うとバイト先の年下の先輩のようなことですね。

単純に敬語を使うだけだと配慮が足りないということも考えられ、お願いする時には自分に恩恵があるのだから「～してください」と言ったほうが適切である、「～してくれませんか」と言ったほうが適切である、というように受益表現が必須になっていったとい



【「くれる」の時代による変化】



うような過程があるのではないかと考えています。

現代でもそのように表現が変わっていくのでしょうか。最近では「ら抜き言葉」がテレビなどでも普通に使われているように思いますが。

「ら抜き言葉」は実は、あまり変化が大きく進んでいない、珍しい類の表現だと思いますよ。「ら抜き言葉」は明治期頃から記録があります。その時点でも、「それ、間違いだよね」という認識があったと思いますが、そこから現代に至るまで、一気に「ら抜き言葉」に入れ替わっているというわけでもない。今でも「ら抜き言葉は間違いだ」という認識は、世間に根強くありますよね。

授受表現で言えば、明治時代には「～していただけませんか」式のお願いの形っていうのはあまり出てこなくて、「～してください」で十分だったんですが、現代だと「～してください」と言ったら、あまりお願いに聞こえなくなってしまっています。目上の人にこの表現を使うのは、絶対にやらせたい時でしょう。例えば、私が学生から「先生、論文論文チェックしてください」とか言われたら、「もうちょっと言い方はないのか」「普通『論文読んでいただけませんか』くらいは言わないか」と思ってしまいます。

そういうような感じで、現代では「くださる」よりも「いただく」が使われるようになってきていると思うんですが、そのように明治から現代にかけて一気に入れ替わったような表現はほかにもあるのではないでしょうか。それに比べると「ら抜き言葉」は、「間違っている」「間違っている」と言われたままで残っている珍しい言葉じゃないかなと思います。

時代による表現の変化が見えるのが面白い

ほかにも最近変わってきたなと思われる表現はありますか。

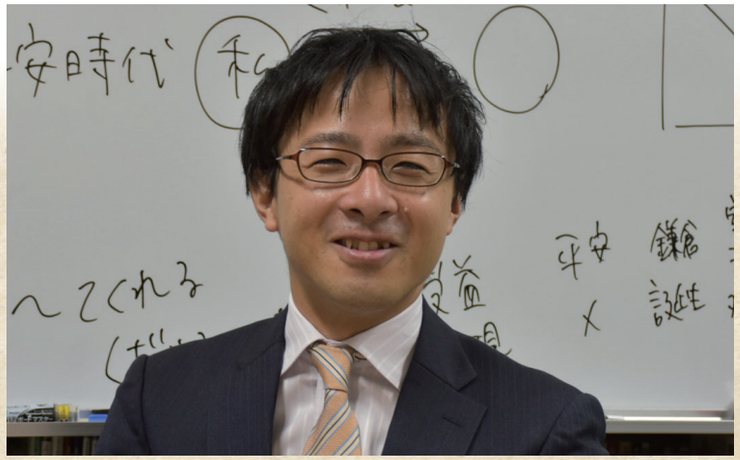
私の研究の分野では、「～させていただく」などですね。一九九〇年代にはもう、「使いすぎである」という指摘があります。明治・大正期にはそれほど使われていたわけではないので、その短い間でかなり変化していることがわかります。現在では、とても頻度が高い表現になっています。

敬語や待遇表現は、どんどん「回りくどい」言い方が出てきています。「～させていただく」のような表現もそうですし、受益表現も、昔はなかったけれども今は使われるようになった。そういう表現が定期的に新しく生まれるので、どんどん回りくどくなっていきますが、そうすると、言葉の意味が伝わりにくくなるというデメリットが生じてきます。つい、丁寧さを求めると回りくどくなりがちですが、メッセージを適切に伝えるためには、簡素な敬語を使うことも必要だと思います。

私のもう一つの研究に、依頼や命令のような行為指示表現がどのようにして行われてきたのかという研究があります。昔は敬語さえ使っておけば、「～たまえ」のように文末が命令形でも良かったわけですが、それがだんだん「～していただけませんか」とか「～していただけないでしょうか」とかのような推量のような表現を使って、回りくどくなってきているんですね。また、「よかったら～していただけませんか」とか、「すみませんが～していただけないでしょうか」とか、前置きをつけた表現なんかも出てきた。

これも、どんどん回りくどくなっていって、伝えたいメッセージや指示しなければいけない内容が伝わらなくなってくるような変化です。

簡素化し過ぎると感情的な反発があり、コミュニケーションがうまくいかないんじゃないかなとも思うので難しいところもあるのですが、敬語の簡素化ももっと考えられていいのではないかなと思っています。



でも先生、「論文チェックしてください」と言われると、「もうちょっと言い方はないのか」って思われるんですよね（笑）。

そうそう（笑）。だから、本音と建前みたいなところはあります。でも実際の学生は、あんまりそういう失礼なことは言いませんし、むしろ「先生、あの、論文なんですけど、もう少しで書けそうなんですが…」みたいな言い方で、回りくどい言い方のほうを選択することが多いですね。むしろ「論文見ていただけませんか」ってちゃんと言ってくれたほうが、きちんと意図が伝わり、印象も良いと思います。

お話を伺っていると、日本語が時代によってどんどん変化してきているのがよくわかります。研究をされていて一番面白いと感じられるのは、どういうところでしょうか。

現代と他の時代と比べてみると、言葉の使い方の変化がはっきりと見えるということですね。データを通して変わってきていることが感じられることが、やっぱり一番面白いかなと思います。

【森勇太先生プロフィール】

一九八五年、静岡県生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、関西大学助教・准教授を経て、現在関西大学教授。専門は日本語史。著書『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』（ひつじ書房、二〇一六年）、『ワークブック日本語の歴史』（くろしお出版、二〇一六年）などがある。

『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』（ひつじ書房、2016年）

『ワークブック日本語の歴史』（くろしお出版、2016年）